

## PCR法を用いた急性中耳炎患児鼻咽腔における薬剤耐性菌の検索(抄録)

酒井章博 保富宗城 島田純 鈴木正樹 池田頼彦 荒井潤 山中昇  
和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科

急性中耳炎は耳鼻咽喉科領域における代表的な細菌感染症であり、従来までは経口抗菌薬の投与にて容易に治癒していた。しかし近年、経口抗菌薬の治療にも関わらず急性中耳炎が改善しない遷延例や、感染を繰り返す反復例などの難治例が増加し大きな問題となっている。このような急性中耳炎の難治化には、ペニシリン耐性肺炎球菌 (PRSP) や  $\beta$ -ラクタマーゼ非産生アンピシリン耐性インフルエンザ菌 (BLNAR) などの薬剤耐性菌の増加の関与が考えられている。

本研究では、急性中耳炎患者 (0歳から10歳) を対象に、鼻咽腔細菌検査を行いPCR法による起炎菌の薬剤耐性化を評価した。すなわち、肺炎球菌においては、 $\beta$ -ラクタム剤の作用標的であるペニシリン結合蛋白遺伝子 (*pbp1a*, *pbp2x*, *pbp2b*) の変異およびマクロライド系抗菌薬に対する薬剤耐性化に関与する *ermAM*, *mefE* の検討を、インフルエンザ菌に関しては、 $\beta$ -ラクタマーゼ遺伝子の検出とともに、*pbp3* 遺伝子の変異を検討した。肺炎球菌では、約30%にペニシリン耐性遺伝子の変異が、70%にマクロライド耐性遺伝子が検出された。インフルエンザ菌においては、 $\beta$ -ラクタマーゼ産生株は約10%に認められたのに対し、*pbp3* 遺伝子の変異を認め BLNAR と考えられる株が約30%に認められた。

今日の難治化する急性中耳炎に対しては、これ以上薬剤耐性菌を増加させず、かつ適切な治療を選択するには、薬剤耐性菌の正確な評価が必要と考える。